

様であつたであろう。この兩人が若し本腰お入れて後援してくれるならば、義門の著述の公刊は容易であつたのである。なおこの消息にわ六月十八日に京都え着き、二十日にわ小濱え歸る豫定であると記してあるのも注意せられることである。次に七月十二日附で、京都から小野務に宛てた手紙にわ「玉緒線分」の彫板の費用に困つている。十兩ばかり借してほしい、と記るされている。思うに義門が危険お冒して長途の旅に出たのわ、著述の出版について後援者お求める事が最大の目的であつたのであろう。そして、この著述ができ上るまでわ歸らないと言つたのわ、原稿の完成ではなくて、恐らくわ「玉緒線分」の彫板お意味するのであろうと考えられる(詳しくわ稿お改めて記すことにする)。

チベットに於ける梵語文法の

翻譯者

稻葉正就

チベット譯大藏經は第七世紀から第一七世紀に互つて翻譯せられたが、その間に八三八年に即位したランダルマ王の廢佛以後、約一世紀半の暗黒時代があつた。そして翻譯官 Rin-chen bzah-po (988-1065 A. D.) が佛教を復興し翻譯を再開したから、彼以前を前傳舊譯時代、以後を後傳新譯時代といはれる。いま私は、大藏經中の文典部と雜部に收められてゐる約五〇部程の

梵語文法書の翻譯について、その奥書に記されてゐる譯者を考察して行くと、年代不明であつた人が、既に年代の判明せる人と共譯してゐることによつて、その年代を大略推定し得る。かくて得た結論の中からチベット人の譯官のみについて簡單に記せば次の如くである。

Shi-ha hod——第一世紀の人。西チベットの阿里の王家の出身。兄の Bryan-chub hod 王は有名な Atiça 招請(1024年チベット到着)に奔走した熱烈な佛教王である。

Chos-kyi ces-rab——第一世紀頃の人。

Chos-kyi bzah-po——第一世紀頃の人。Rohzom の譯官。

インツの Dharma-bhadra と同一人でない。

Grags-pa rgyal-mtshan——1147~1216の人。密教學者である

るとともにツラレームの詩に感銘をうけた神祕な詩の註釋をも残してゐる。また歴史書及び醫藥書もある。

Nam-mkhañ bzah-po——第二三世紀頃の人。カーリダーサ

の Meghadūta の譯者。Tucci 教授は、この人は Gosma の

と Nam-mkhañ rgya-mtsho と同一人であるといふ(Tibetan

Painted Scrolls. I. p. 123)。やうするとインツのチベット語の文

法「三十」「性入」の註釋を書いたことになる。

Dpal-ldan Bsod-nams bzah-po——第二三世紀頃の人。

Çañ-ston Rdor-je rgyal-mtshan——第一三世紀後半から第一

四世紀初頃の人。サキヤ派の詩人。宮廷詩鏡や韻律意讀を譯

した。元の初代帝師八思巴(1235-1280) が元からチベットへ歸つ

た時に彼を讀へて歌つた詩がこの人の最初の詩の一つである。

またすぐれた梵語文法學者でもあつた。

Dpal-ldan Blo-gros brtan-pa——第一三世紀後半から第一四世紀前半頃の人。前の Coñ-ston の弟。Dpañ の譯官といはれるから「聲明記論本論の心髓を明らかにす」といふ書及びその自註「聲明記論極大明」といふチベット語の文法書（東北西蔵撰述目錄(69)）の著者と同一人であらう。

Ni-na rgyal-mtshan dpal bzah-po——第一三世紀後半から第一四世紀前半頃の人。Bu-ston の師匠。

Chos-grags dpal bzah-po——第一三世紀後半から第一四世紀前半頃の人であらう。

Dharmagribhadra——1288～1362。インドの譯者に同名の人があつたが同一人ではない。

Rin-chen grub (= Bu-ston)——1290～1364。有名なブトン佛敎史の著者。

Byañ-chub rtsé-mo——1303～1380。

Rjiam dbyaṅs ral-gri——第一四世紀頃の人。チベット語の文法書を著作した人の中に Rjiam dbyaṅ とあるのはこの人と同一人であらう(G. Schubert: 'Tibetische Nationalgrammatik. Leipzig, 1937 p. 12')。

Ces-rab rin-chen——1405～? Stag-tshan の譯官。

Chos-skyoñ bzah-po (= [Ratna-] Dharmapālabhadra)——1441～1528。Sha-lu 寺の譯官。チベット語の文法書として Zama-tog 及びトントンの「三十」「性入」の註釋（東北西蔵撰述目錄 7071, 7072）の著者（拙著「チベット語古典文法學」三三一～三八頁參照）。

Nag-dban Rin-chen bkra-gis——第一五世紀後半から第一六世紀前半頃の人であらう。

Taranatha (Jo-nan)——1575～? 藏地方出身。有名なインド佛敎史の著者。

Nag-dban Phun-tshogs lhun-grub——第一七世紀頃の人であらう。パーニニ文典の譯者。

Dkon-mchog chos-grags——第一七世紀の人。藏の Shan 地方の Rnam-rgyal gñia の人。パーニニの Dhātu の譯者。この人はチベット語文法「善釋光明摩尼」（六四巻を著してゐる Schubert 前掲書 p. 12）。

Things-rije dpal-bzah-po——第一三世紀以前の人ではあり得ないが第一六世紀を降ることもないであらう。すべて不詳。

★ ★

以上の翻譯者はすべて後傳新譯時代の人ばかりである。さらには前傳舊譯時代に梵語文法書は全く翻譯せられなかつたのであらうか。私はさうは考へない。第八世紀後半頃の人と思はれる Loë-khyi 'dbrug の「八大處根本」（東北 350）といふチベット語文法書の中に（北京版 24 函 42b）

hdzambu 'yi hbras-bu smin-pa ni/ シャンン樹の熟した實が
dri-ma med-pa'i chu-lhun/ 無垢なる水の上に落ちた。

ña yis bzah-ba'i ched-du ni/ 魚によつて食ふられるために
gu-lu gu-lu shes su smra/ 揺れよ揺れよ誰かがいふ。

といふ偈があるが、この偈は Subhasakīrti の「一切言語轉用聲明記論（東北 4290）及びその註釋（東北 4291）といふ梵語文法書か

ら引用したものである。すなはち八大處根本が書かれる前に既にこの梵語文法書が譯せられてゐたのではなからうか。さうすれば、前傳時代にも梵語文法書の翻譯は行はれてゐたことになる。譯者名を失つてゐるものの中に前傳時代の翻譯になるものがあるかと考へられる。しかし勿論それは僅少であつて、梵語文法書の翻譯は第一三世紀から第一五世紀に最高潮であり、就中 Cui-Ston 兄弟及び Dharmapālahadra の努力に負ふところが最も大きく、この三人の翻譯を合計すると現存せるものの約半數に達する。

最後に注意を喚起すべきことは、中國に於ては一部の梵語文法書も漢譯せられず中國文法學に何らの影響も及ぼさなかつた。それに反してチベットに於ては、佛教の梵語原典を理解するためには梵語文法を知らねばならないといふ意圖のもとに翻譯が行はれたと考へられる。そしてこれら翻譯者の努力はチベット語の文法學を興起せしめることになつた。上述せる如く、これら翻譯者の中の五人がチベット語の文法書を著してゐる。特に Dharmapālahadra はチベット語文法學史の上で重要な地位を劃し、第一八世紀前半に *St. hr* をしてチベット語文法學を集成せしめる基礎を築くに至つた。

『阪東本』に先行する教行證文類 と信卷別撰論

日 野 環

親鸞の阪東本『教行證』の研究は、その眞理内容の研究と著述としての諸課題の研究に一應は分ち得る。眞理内容の研究はその「文相」を通じて「文義」を把握し、その宗要に達する事にある。「文相」は『顯淨土眞實教行證文類』に於ける記述の様態であり、記述は親鸞の手記であり筆蹟である。かくて本典の眞理内容の研究と選述の研究とが文相を通じて結び付くのである。かくの如くして研究の最高の資料として『阪東本』が脚光を浴びて登場して來る。

(一) 『阪東本』の觀察——課題に必要な限界に於て——

(イ) 著述年代の資料的記述

○元仁元年——(宗祖五十二歳)(化身十卷)

○後堀川院・佐渡院等註記(六十二歳—七十七歳)(化身十卷)

△尊蓮見寫の識語——(寛元五年—宗祖七十五歳)(寛永版御本書)

△存覺『六要』の註記 此書大瓶類聚之後聖人不幾歸寂之間不及再詔

(ロ) 料紙 七八種の紙を混用し反古紙の紙背を用ひたるころ

あり、また大小様々の短紙を用ふ。大體は美濃紙を袋綴りとして用ふるも、紙質によつてはこれを粘葉の如く兩面書とし、また或は卷子本を切斷して袋綴